

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第9章 エルサレム教会における祈り①



序 論

初代教会の最初の祈禱会

「使徒の働き」は、クリスチャンの特別な群れが行なった働きの記録が靈感されたもの、という以上の存在です。それは、生まれたての教会の活動の記録、その教会の内部で、また、それを通しての聖霊の活動の記録、そして、人間的なものと同魔的なものの両方の意味で、教会を妨害し滅ぼそうとする悪の勢力の活動の記録が靈感されたものなのです。聖霊によるこの新たな動きの、その初期の時代を特徴づける超自然的な出来事に決定的だったのが、**初代教会の祈り**だったのです。

この魅力的で興味深い歴史書に一つ主要な教訓があるならば、祈りは不可欠なものだということです。祈りが無かったなら、神への畏れを引き起こしてくれるこのような物語は、生まれることがなかったでしょう。初代教会は七日から十日の祈禱会から誕生しました（使徒 1:13-14）。教会は祈りのうちに継続し（2:42）、祈りは教会を持続させる力であり続けたのです。



初代教会の最初の祈禱会

キリストの昇天に続く最初の祈禱会が開かれた状況は、誤解の余地が無いほど明快なものでした（使徒 1:13-14 参照）。動機は、教会のかしらなるイエスに直接に由来するものでした。イエスは具体的に、彼らに祈れと言われたわけではありませんでしたが、弟子たちは、留まって（ルカ 24:49）待つ（使徒 1:4）この時が、祈りに満ちたものになるべきことを十分に悟っていました。「留まる」は、「座る」「落ち着く」を意味するギリシア語「カスイツゾー」の翻訳です。

彼らは町に入ると、泊まっている屋上の間に上がった。この人々は、ペテロとヨハネとヤコブとアンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党員シモンとヤコブの子ユダであった。この人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していた。(使徒 1:13-14)

約束の賜物(ルカ 24:49、使徒 1:5 参照)は、待つ価値のあるものでした。

約束された聖霊の力を待ち望む彼らの思いが切なるものであったことは、「みな心を合わせ、祈りに専念していた」という従順な祈りに示されています。彼らが実際にどれほどの重荷を覚えながら祈っていたかについては、記録は残っていません。あるのはただ、後にユダの後継者を選ぶ際に導きを求めている箇所だけです。しかしながら、この待つ期間の彼らの祈りは、聖霊の到来という、待っていた目的と関係していたに違いありません。

彼らの礼拝においては、讚美もまた重要な要素でした。

復活後の顕現において、イエスは、弟子たちが聖書を理解できるようにと彼らの思いを開かせられました(ルカ 24:45)。神の贖いのご計画における十字架と復活の意味は、いまや彼らに驚くほど明確になっていました。彼らの心が神への讚美に満たされていたのはそのためであり、神殿においても、おそらくは朝と夕の祈りの時間に、絶えず讚美を捧げていました(ルカ 24:53、使徒 3:1)。思いと心が開かれ、神のご計画が成就するのを待ちつつ、彼らはいつでも準備の整った状態、信仰の一致と期待の中にあつたのです。この待つ期間は重要でした。というのも、聖霊のバプテスマを与えるにあたっての神の目的は、彼らを力強い証人にするのであつたからです。ペンテコステの日、エルサレムには再び群衆が集まってきました。その中で、弟子たち百二十人は一箇所に集まっており、彼らが聖霊に満たされると、それは強力な衝撃をもたらすものとなりました。かくして、待ち続ける日々は終わりました。弟子たちが聖霊に満たされた結果、待てと言われる期間はもはや二度と聖書に現れることはなかったのです。

使徒行伝は初代教会の共同体としての態度を、「ボモスユマドン」(ギ)一つの思い/目的/衝動で(GELNT、566頁) — という描写的な言葉で描き出している。この語は、欽定訳ではしばしば「一致して」と訳されている。新約聖書に現れる十二回のうち十一回が使徒行伝に見られるのは興味深い。……人々が一致していたところ、しばしば神の力が顕されたのである。

弟子たちの祈禱会については、そこに集っていた人々が特に興味深いところです。そこにはいかなる区別も見取ることができません。

使徒たちも弟子たちも、男たちも女たちも、彼らはみな一つのからだとしてそこにいたのです。「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあつて、一つだからです」(ガラテヤ 3:27-28)。そこには何の喧嘩も口論も見取ることができません。それはほぼ、家族の出来事だったのです。そこにいたいと思う人々は皆、そこにいたのです。排除される人は誰もいませんでした。信仰の家族とは、まさにそのようなものなのです。

彼らの上に聖霊が注がれた際にも、同じ「非排除性」とでも呼ぶべきものがその場を支配しました。全員が満

たされたのです。「すると、みな**が聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました**」(使徒 2:4)。祈りも同じです。あらゆる人のためのものです。誰も、この光栄な特権、重要な責任に与れず取り残されたなどと感じる必要がないのです。男性も女性も、地位の高い者も低い者も、富める者も貧しい者も一神の御座の前には、あらゆるクリスチャンが同じ条件で集うのです。

初代教会のこの最初の祈祷会の結果は、その後の世界に絶えざる影響を与えるものとなりました。教会が未だかつて無い方法で聖霊を受け取ることができるようになったのです。

聖霊がペンテコステの日以前にも世界にご臨在であったことは否定できません。しかし、聖霊がそれほどまでに多くのクリスチャンのもとに来られ、証人となるための力が賦与されるというのは、それ以前には思いもつかないことだったのです。

ペンテコステの日の出来事は、それに先立つ祈りによって備えられたものであり、著しい結果をもたらすものとなりました。「すると突然、天から、激しい風が吹いて来るような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った」(使徒 2:2)。

風が聖霊を表す一般的な象徴であるということは、少し気の利いたユダヤ人ならば誰でも知っていることでしたが、これは祈っていた人々の間に大きな興奮をもたらすものとなったのです。

風が続いて現れたのが火です。「また、炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった」(使徒 2:3)。火もまた、ユダヤ共同体においては神のご臨在を表す象徴として即座に認識されるものでしたが(出エジプト 3:1-6, 列王記上 18:38-39 参照)、これは「その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります」(ルカ 3:16) という、バプテスマのヨハネの言葉を思い起こさせるものだったに違いありません。

この驚くべきしるしの現れは、今や聖霊の与えられた 120 人に対し、声高に語りかけていたに違いありません。そこに起こったのがこれです。「すると、みな**が聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました**」(使徒 2:4)。これらすべて、そしてその後が続くさらに多くの事柄は、長期にわたったその祈祷会がペンテコステの日に至るまで焦点を合わせ続けた、あの神の約束から生じたものなのです。

私たちの学ぶ教訓は重要です。

- ① 祈りは、聖霊が注がれるうえで主要な鍵である。
- ② キリストの御体が一致へと導かれるためには長期の祈りが必要なことがある。
- ③ 祈りは、神の力が強力に現されるに先立つものである。

教会初の長い祈祷会では、ユダに代わる人物を決めるという、リーダーたちにとっては非常に残念な問題が出てきました(使徒 1:15-26 参照)。使徒たちが自分たちは 12 人であるべきだと結論づけたのは、イエスご自身の願いに従っていたように思われます。元の 12 人の一人であるユダは、自らの命と使徒としての立場を、自殺という形で終えてしまっていました。それで、ここに至り、別の人を置くのが適切だと思われたのです。

居合わせた多くの中から二人が選ばれました。なぜ、どのようにしてこの二人だったのかについては語られていません。両者とも、しかるべき条件に従って資格ありと認定されたに違いありません。

この高い地位を占めるためには、イエスの働きの般初から仲間におり、その昇天まで従ってきた人でなければなりません。また、復活の証人でもなければなりません（使徒 1:21-22 参照）。この条件に適合する人々はおそらく、最初の七十人（ルカ 10:1 参照）の中に数名はいたことでしょう。

ところが、候補者として選ばれたのは、バルサバと呼ばれるヨセフと、マッテヤの二人だけでした。「そして、こう祈った。『すべての人の心を知っておられる主よ。この務めと使徒職の地位を継がせるために、このふたりのうちのどちらをお選びになるか、お示してください。ユダは自分のところへ行くために脱落して行きましたから。』そしてふたりのためにくじを引くと、くじはマッテヤに当たったので、彼は十一人の使徒たちに加えられた」（使徒 1:24-26）。

ここで気になるのは、この祈りとくじ引きに先立って何があったのかということです。実際に投票がなされて、それぞれの候補が同数の票を取ったのでしょうか。あるいは何か、お互いに合意できる手続きに従ったのでしょうか。

いずれにせよ、120 人が判断できる限り、資質・資格として等しい二人が残ったわけです。それでは、この二人をめぐっての決定はどのようにするべきか。自分たちの心を知るのは神だけだという認識、また最終的な判断材料として、神のための働きにふさわしい資質はその人の心であるという認識に立ち、これらキリスト教信仰の先駆者たちは祈りに訴えるのです。そして、祈りの後、「くじを引くと、くじはマッテヤに当たった」（使徒 1:26）というわけです。しかしながら、くじを引くことや羊の毛を置くこと、その他の同様の方法を用いることは、神が今日、人を導く方法として用いられるものではありません。なぜなら、私たちを導くには聖霊がおられ、聖書が存在するからです。もっとも、私たちは、ご自分の導きを求め、みこころの確信を求めてそのような手段に訴えかけた人々の単純な信仰を神が尊重してくださったものと信じることもできます。彼らは「くじは、ひざに投げられるが、そのすべての決定は、主から来る」（箴言 16:33）ということを認識していたからです。